

平成22年度 東村山市立 東村山第一中 学校 学校評価報告書

学校教育目標

・よく考え自ら学ぶ人となろう ・広く他を思いやる人となろう ・明るく心身共に健康な人となろう

目指す学校像(ビジョン)

- 【目指す学校像】 ・生徒が通いたい、だれもが子どもを通わせたい学校。
- 【目指す児童・生徒像】 ・各教科の基礎的な学力を保證できる学校。
- 【目指す教師像】 ・保護者や地域の方から信頼される「開かれた」学校。

前年度までの学校経営上の成果と課題

成果; 1. 人権感覚が育まれ醸成されるとともに、子ども達の個性豊かな活動が保證されている。 2. 個々の教師の想像力豊かな発想と、率先垂範の実践的教育力が生かされている。
 課題; 1. 学校不適応及び不登校の出現率が高い。 2. 日常生活指導における規範意識の徹底と家庭連携。

	具体的方策	第1回評価		課題と対策	第2回評価		課題と次年度以降の対策
		努力目標	成果目標		努力目標	成果目標	
学力向上	・教師相互の授業参観を中心としたOJTによる授業力向上。	3	3	・基礎学力を高めるために、基礎学力の定着していない生徒へのアプローチ。特に、個別に学習支援を要する生徒への課題を克服していくことが大切。学習の成果が見られる出題の工夫をしていく。	3	3	・校内外の研究授業が計画的に実践され、教師相互に授業を参観する機会には恵まれている。反面、授業の持ち時数の関係から、授業の空き時間に研究授業を参観することが厳しい環境にもある。単に授業だけでなく、個々の子供の学習状況や学級経営、保護者対応などの側面からも資質向上を図ることが求められる。
	・内部評価を中心とした指導方法の工夫や、自己啓発研修による授業改善。	3	3	・個別に学習支援が必要な生徒に対して、どのような方策をとるのか内部で検証していく。また、小学校との連携のあり方などを、研修会を通して事例実践を重ねていく。	3	3.5	・日常的な教科指導の中には、個に応じた指導(補充学習やテスト前対策など)を心がけている。教科部会や生活指導部会など、学校全体の取り組みであったり、教科ごとや学年内の取り組みと工夫は見られる。今後は、組織的な学校としての取り組みをいかに構築するかが大切になってくる。
健全育成	・個が大切にされる集団の育成。	4	3.5	・不登校や学校不適応に対する校内での体制つくりについて。親子関係の改善や学校ではなかなか取り組みにくいこともあるが、まず情報を収集する手段や解明の努力をすることから。	4	3.5	・今年度の研修でも、生徒のみならず保護者対応でも、個々の状況に応じた相談活動を実施している。小さな個人の声にも謙虚に耳を傾け、学校生活の中で何を望んでいるかを拾っていくことが大切であると考え。課題としては、対応に時間を要する場面が多くあり、より迅速な対応が必要と思われる。
	・外部人材による実践的教育活動の推進。	3	2.5	・外部人材の導入と一口に言っても、学校の意図する人材となると、そう簡単には見つからないのでは。経験豊富な人材を学校だけでなく市や外部機関とも連携して確保しておくことも大事。	3	3	・今年度は交通安全教室など、外部人材を登用した学習も試行できた。学校の教育課程を計画的に執行していく上で、年度途中の学部からの要望には応えられない状況にある。今年度も租税教室やごみの減量化の学習などの希望はあったが、地域からの要望に応えられない実情があった。
健康・体力づくり	・運動部の活動を中心とした健康、体力増進活動の実践。	4	4	・部活動の加入率は80%を超えている。また、外部の地域クラブ等に所属している子どももいる。子どもにとっては部活動等は自分の余暇時間を有効に使う活動であり、定着率も高い。しかし、楽しみや喜びだけでなく、辛さや苦しさなどを乗り越える精神的な強さも求められる。体力といえども、心を鍛えることも重要である。楽しさと苦しさは反対の関係にあり、そこをいかに指導者が子どもに教えられるかが問われる。	4	4	・運動部のみならず文化部でも加入率が高まっている。校内の平均は80%を超える加入率がある。特に今年度は吹奏楽部にも多くの加入があり活性化につながっている。部活動は子供たちが楽しみにしている活動でもあり、安全にかつ十分な運動量を保証する中で、健康増進や体力の向上、また将来にわたって運動に親しみ環境が整備されればよい。しかし、運動部によっては競技性が高く、単に楽しみだけでは継続が難しいのが現実でもある。多くの運動部では健康や体力の向上につながる試みがなされているが、子供の中には精神的な苦しさを一人で乗り越えられない難しい側面もある。こうした相反する両面を、いかに両立させるかが指導者には求められている。
特色ある学校づくり	・特別支援教育の充実。	4	3.5	・行事を中心とした交流活動が中心になっている感がある。日常的な交流活動を推進していくことが更に求められる。特別支援学級設置校の利点を生かすならば、特別支援学級と通常学級との壁をなくしていくことが大切と思われる。全校朝会や生徒会朝会などは、特別支援学級生徒の学習活動や行事への取り組み過程などを、もっと報告したり、生徒の出番を多くする試みがあってもいいのではないかと。学校不適応、不登校生徒の出現率を、年度内に3%以下を目標とする。	4	3	・多くの校内行事や生徒会活動・部活動などでは、特別支援学級の生徒が通常学級の活動に参加し交流を深めている。また、通常学級の生徒も特別支援学級の生徒に対してきめ細やかな配慮が感じられる。生徒会では、放送委員会の昼休みの放送担当を日常的に担っている。通常学級では、特別支援教育コーディネータ・養護教諭・スクールカウンセラーが中心になり、毎週定例会で支援を要する個々の生徒に対する課題や支援状況を確認している。この支援を要する生徒への日常的な手立てが実践面に十分に反映しきれないのは課題である。次年度、教職大学院等のボランティア人材が確保できれば事態解消の一步になるとと思われる。
地域との連携	・開かれた学校つくりとボランティア活動の推進。	4	3	・地域高齢者施設への吹奏楽部の訪問、地域行事(青少対や自治会行事など)への積極的な参加、ボランティア活動を積極的に推進していく。今年度は、昨年度よりも多くの生徒がボランティア活動に参加できるように案内・広報活動を展開していく。	4	3.5	・学校便り・学年便り・学級だより、また学校HPでも学校情報をできるだけ公開している。しかし、どれだけ家庭で読まれているかは確認ができていない状況にある。副校長は、地域の関係者にも学校便りを毎月届けている。学校公開週間や行事を通して直に見てもらおうのが一番と考えている。先の合唱コンクールには、会場が福生にもかかわらず522名の参観があった。 ・地域の中学生ボランティア募集案内を、職員室前の掲示板を利用して生徒に案内するようにした。それぞれの地域活動には、毎回参加がみられる。しかし、ただでさえ忙しい中学生が、さらにボランティア活動となると、なかなか厳しい現状がある。あくまでもボランティアの趣旨をふまえた自主・奉仕活動にとどめたいが、中学生ボランティアへの要望は大きい。